

# Lemma 化の危険性：one's を例に

西脇幸太

## Abstract

The purpose of this paper is to discuss the risks involved in lemmatization, focusing on the word *one's*. Using the data from corpora, we will show that risks are involved in the lemmatization of the possessive determiners (*my, our, your, his, her, its, and their*) in the expressions *To one's+NOUN OF EMOTIONS* and *To (the best of) one's knowledge*, but not in the expression *make one's way*. From the viewpoint of pedagogical English grammar, we will then consider how the descriptions related to *To one's+NOUN OF EMOTIONS*, and *To (the best of) one's knowledge* can be improved.

キーワード：lemma 化, 人称代名詞の所有格形, one's, 学習英文法

## 1. はじめに

本稿では、人称代名詞の所有格形を one's として纏め上げる (lemma 化する) ことの危険性について論じる。具体的には、〈make one's way〉, 〈to one's+感情を表す名詞〉, 〈to (the best of) one's knowledge〉という3つの表現を例に挙げ、COCA および iWeb から得られたデータに基づき、以下の3点を示す<sup>1)</sup>。第一に、〈make one's way〉の one's の位置には、my, our, your, his, her, its, their のすべてが一定数以上、生起する。第二に、文頭に生起する〈To one's+感情を表す名詞〉の one's の位置には、1人称および3人称は生起しやすいが、2人称は生起しにくい。そして第三に、文頭に生起する〈To (the best of) one's knowledge〉の one's の位置には、1人称および2人称は生起しやすいが、3人称は生起しにくい。以上のように、ある表現とその表現で使用される one's の人称の傾向を指摘し、特に〈to one's+感情を表す名詞〉と〈to (the best of) one's knowledge〉については、既存の学習参考書や学習英和辞典での記述に対して改善が必要と思われる点について議論する。なお、本稿では「学習英文法」を学習参考書や学習英和辞典で提示される文法項目と定義し、主に高等学校以上の学習段階で教授者が学習者に対してその内容を具体的にどのように提示すべきか、という観点から論じる。

本稿の構成は、以下の通りである。2節では、本稿での議論の前提となる問題意識について論じる。3節では、本稿で対象とする人称代名詞の所有格形 (my, our, your, his, her, its, their) および英語表現 (〈make one's way〉, 〈to one's+感情を表す名詞〉, 〈to (the best of) one's knowledge〉) を明示する。4節では、対象となる3つの表現に関しての事実観察をもとに既存の学習参考書および学習英和辞典の記述の改善を検討する。5節はまとめである。

## 2. 問題意識

本節では、本稿での議論の前提となる問題意識について論じる。それは、lemma 化することに伴う危険性である。英語に限らず、ある言語を学ぼうとする際、語彙の学習は不可欠である。ある語の提示方法としては様々な観点から考えられるが、本稿では、「辞書形と活用形」という観点から議論する。辞書形でもその活用形でも、その語の生起環境に強い傾向がない場合は、辞書形で提示することが基本となるだろう。しかし、辞書形では使用されず、ある活用形でのみ使用される表現も存在する。あるいは、辞書形ではなく、活用形での使用が顕著に観察される表現がある。このような語について学習者に指導する場合には、単に辞書形を提示するだけでは不十分、あるいは不適切と言わざるを得ない。つまり、辞書形に纏め上げることには危険性が伴うとも言える。

Stubbs (1996: 38) は “Not only different words, but different forms of a single lemma, have different grammatical distributions.” と述べ、ある語を lemma 化することの危険性について指摘している（同様の指摘については、Kjellmer (1991: 126), Stubbs (2002: 24) も参照）。また、滝沢 (2005, 2007) は、日本語の観点から lemma 化の危険性について論じている。例えば、滝沢 (2007: 66) は、日本語の「元をただす」という動詞句は「元をただせば」のようにバ形のみで使用されることを指摘している（「\*元をただした」、「\*元をただそう」(滝沢 (2007: 66))。「ただせば」の部分を辞書形の「ただす」と纏め上げてしまうことは、言語の使用実態の適切な記述の観点からも言語教育の観点からも好ましくない。

また、滝沢 (2006: 181-2) は、英語の形容詞 foggy の最上級形 foggiest について、その右隣に idea や notion が高頻度で生起することを指摘している。以下、COCA を用いて検証する。まず、辞書形 (原級) の foggy の右隣に生起する語を観察する。(1a) は処理に使用する正規表現である。(1b) は、(1a) の正規表現を用いて抽出された括弧内の語をすべて小文字に直し、その生起回数 ((1b) の括弧内の数字) を集計し頻度順に並べたものである。

- (1) a. (?i)\bfoggy ([a-z-]+)\b  
 b. bottom (111), night (62), and (34), day (31), morning (26), days (15), with (12), mountain (10), brain (9), glass (8), in (8), or (8), afternoon (7), mornings (7), on (7), dawn (6), from (6), nights (6), summer (6), air (5), thinking (5), to (5), valley (5), weather (5), about (4), as (4), bathroom (4), crystal (4), eyes (4), london (4), memory (4), out (4), san (4), sea (4), state (4), that (4), bottom-gwu (3), city (3), coastal (3), dark (3), depths (3), distance (3), evening (3), feeling (3), future (3), head (3), images (3), light (3), mind (3), patch (3), place (3), places (3), saturday (3), there (3), voice (3), world (3) (頻度 3 以上) ※ idea および notion は 2 件。ideas は 1 件。

辞書形の foggy の右隣には bottom や night などが高頻度で生起するが、idea(s) や notion は極めて低頻度である。なお、今回の処理では、大文字であっても小文字に直し集計をしているため、例えば Foggy Bottom (Washington D.C. の地名) のような固有名詞で、語頭に対して本来は大

文字を用いて綴られるべき語もすべて小文字になっている（滝沢（2016: 52）参照）。次に、最上級形の *foggiest* の右隣に生起する語を見てみよう。

- (2) a. (?i)\bfoggiest ([a-z]+\b)  
 b. idea (43), notion (23), about (2), memory (2), month (2), place (2), august (1), clue (1), darkness (1), end (1), goddamn (1), going (1), is (1), july (1), understanding (1), what (1)（下線は西脇による。以下同様）

滝沢（2006）の指摘通り、*idea* や *notion* が高頻度で生起することが確認できる。辞書形の *foggy* と最上級形の *foggiest* には、それらの使用環境において顕著な違いが認められるため、単に辞書形の *foggy* を学んだだけでは、*foggiest* を適切に使いこなすことはできない。言うまでもなく、学習には段階があるため、まずは辞書形から学習するという自体は何ら問題ないと考えますが、学習が進んだ段階では最上級形に特徴的な表現を意識させることも重要である。なお、滝沢（2006: 182）では、*foggiest idea [notion]* について、*haven't the foggiest idea [notion]* というパターンで生起しやすいことが記述されている。詳細、およびその類例については滝沢（2006: 181-3）を参照されたい。

以上のように、言語の記述およびその教育の観点から、lemma 化することに危険性があることを問題意識として示した。以降の節では、以上の問題意識を念頭に、具体的な人称代名詞の所有格形を *one's* と lemma 化することの危険性について議論する。

### 3. 本稿で対象とする人称代名詞の所有格形および英語表現

学習英文法では *my*, *your*, *his* などの人称代名詞の所有格形や、*Mary's book* や *the teacher's dictionary* などの「名詞 + 's」の形を纏めて *one's* と表記することがある。本稿では、*one's* を以下の (3) に示す 7 種類の人称代名詞の所有格形として議論を進めることにする。

- (3) *my*, *our*, *your*, *his*, *her*, *its*, *their*

(3) の人称代名詞の所有格形を用いる表現としては、例えば、〈*make one's way*〉、〈*to one's*+感情を表す名詞〉、〈*to (the best of) one's knowledge*〉などがある。具体的には、以下のような例である。

- (4) a. 〈*make one's way*〉<sup>2)</sup>  
 [...] I made my way down as quickly as I could, holding on to the rail on the side.  
 (Michael Gates Gill, *How Starbucks Saved My Life*, p. 172)  
 b. 〈*to one's*+感情を表す名詞〉<sup>3)</sup>  
To my great surprise [Much to my surprise], my house was on fire when I came home.  
 (G5, *surprise* の項)

- c. 〈to (the best of) one's knowledge〉<sup>4)</sup>

To my knowledge she has not left yet.

(G5, knowledge の項)

本稿では、〈make one's way〉、〈to one's+感情を表す名詞〉、そして〈to (the best of) one's knowledge〉について議論する(〈to one's+感情を表す名詞〉と〈to (the best of) one's knowledge〉については、文頭に生起するものに限定して議論を進め、文頭であることを明示する場合は、toはToと表記する)。これらの3つを対象とする理由は、それぞれのone'sの箇所に生起する語に特徴的な違いが認められるからである。詳細は後述するが、簡潔に結論を述べると以下ようになる。

- (5) a. 〈make one's way〉: one'sの位置にmy, our, your, his, her, its, theirが生起し、極端に低頻度な語はない<sup>5)</sup>。  
 b. 〈To one's surprise〉: one'sの位置に1人称および3人称は生起しやすいが、2人称は生起しにくい。  
 c. 〈To (the best of) one's knowledge〉: one'sの位置に1人称および2人称は生起しやすいが、3人称は生起しにくい。

以下、one'sを用いた3つの表現を、one'sに生起する語の人称に焦点を当てて観察する。

#### 4. 事実観察および学習者への提示方法に関わる提案

本節では、〈make one's way〉、〈To one's+感情を表す名詞〉、そして〈To (the best of) one's knowledge〉の3つの表現について、one'sにどのような人称代名詞の所有格形が生起するのを中心に事実観察を行う。また、その観察に基づき、学習英文法の観点から学習者にこれらの表現を提示する際にどのような点に注意すべきかを議論する。

本稿では、主にCOCAを対象にして事実観察を行うが、対象とする表現によっては、COCAでは極めて少数しかヒットせず、有意な議論にならない場合もある。また、複数のコーパスを対象にした処理結果を比較することが効果的である場合もある。そのようなときには、COCAよりも大規模なiWebを使用することにする。

##### 4.1. 〈make one's way〉

まず、〈make one's way〉について議論する。この表現はG5, OL2, W4などの学習英和辞典では記載があるが、BT総合2, CC総合, G総合2などの学習参考書では記載がない。やや上級者向けの表現と言えるだろう。なお、学習英和辞典での表記は、〈make one's way〉とされるのが一般的である<sup>6)</sup>。

では、〈make one's way〉のone'sに生起する語を見てみよう。本稿では、辞書形と活用形の問題について議論しているため、データ抽出をする際は、makeの活用形ごとに処理することにする。つまり、正規表現でma(k(es?|ing)|de)と纏めて一括で処理することも可能だが、make,

makes, made, making の場合をそれぞれ検索する。なお、処理としては概ね、make（およびその活用形）と way の間に生起する my, our, your, his, her, its, their を、大文字小文字の区別をせず、すべて抽出し、抽出された語が大文字の場合は小文字に直し、その合計を算出する、という内容のことは行っている。a 欄には正規表現を示し、b 欄にはその処理結果を各語の頻度（括弧内の数字）と共に示す。では、以下、順に見ていく。

(6) <make one's way>

- a. (?i)\bmake (my|our|your|his|her|its|their) way\b  
 b. their (735), his (224), our (188), my (181), its (177), your (137), her (126)

(7) <makes one's way>

- a. (?i)\bmakes (my|our|your|his|her|its|their) way\b  
 b. his (460), its (232), her (148), their (8), our (1), your (1), my (0)

(8) <made one's way>

- a. (?i)\bmade (my|our|your|his|her|its|their) way\b  
 b. his (1,060), their (850), her (532), its (481), my (365), our (208), your (12)

(9) <making one's way>

- a. (?i)\bmaking (my|our|your|his|her|its|their) way\b  
 b. their (380), his (291), its (260), her (151), my (60), our (45), your (21)

最後に (6) - (9) を纏めた頻度を (10) に示しておく。

- (10) a. (?i)\bma(k(es?|ing)|de) (my|our|your|his|her|its|their) way\b  
 b. his (2,035), their (1,973), its (1,150), her (957), my (606), our (442), your (171)

(7) に示した 3 人称単数現在形の makes の場合に 3 人称代名詞が高頻度であることは当然であるが、その他の (6) (8) (9) では、2 人称の your が全体としては、比較的、低頻度であることは指摘できるが、極端に低頻度という人称はなく、7 つの人称代名詞すべてが一定数、分布していることが確認できる。以上の事実観察より、学習英和辞典における <make one's way> という one's を用いた表記は、妥当であり特段の問題は生じないと考えられる。

#### 4.2. <To one's+ 感情を表す名詞>

次に、<To one's+ 感情を表す名詞> について議論する。学習参考書では、以下の表 1 のように提示されている（下線は西脇。太字による強調は原典のまま。各例の和訳は省略。一部、提示方法に変更を加えている）。

表1 学習参考書における〈to one's+感情を表す名詞〉の提示方法

BT 総合2 (p. 506)	[例文] To my surprise, he won the race. […]「(人が) …したことはない」 to one's joy/ sorrow/ disappointment など、…の部分には感情を表す名詞がくる。[…] [例文] To his parents' disappointment, he lost.
CC 総合 (p. 613)	〈to one's+感情を表す名詞〉で「…が～したことはない」という文修飾の副詞句になる。 [例文] To my (great) surprise [ (かたく) Much to my surprise], he suddenly handed in his resignation. to one's astonishment / to one's disappointment / to one's dismay / to one's regret / to one's shock / to one's sorrow / to one's surprise
G 総合2 (p. 552)	[…] 〈to one's+感情を表す名詞〉(人が～したことはない) も結果を表す表現である。 [例文] To my surprise, she objected to the plan. この表現でよく使われる名詞には次のようなものがある。 amazement, delight, dismay, joy, regret, relief, surprise

いずれの学習参考書でも one's という表記である。

ここで、〈To one's+感情を表す名詞〉の one's に生起する語について、COCA を対象にして観察する(〈To one's+感情を表す名詞〉については、西脇(2021)も参照)。「感情を表す名詞」には複数の語が生起するが、BT 総合2 に掲載されている surprise, joy, sorrow, disappointment について調査する。また、文修飾の用法に可能な限り限定するために、〈To one's+感情を表す名詞〉の To は大文字の T で始まるものを検索対象とする。以下、順に見ていく。

(11) 〈To one's surprise〉

- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) surprise\b  
b. my (238), his (159), her (124), our (54), their (40), its (0), your (0)

(12) 〈To one's joy〉

- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) joy\b  
b. ヒットなし

(13) 〈To one's sorrow〉

- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) sorrow\b  
b. my (2), これ以外はヒットなし

(14) 〈To one's disappointment〉

- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) disappointment\b  
b. my (6), his (5), her (4), our (1), their (1), its (0), your (0)

(11) の 〈To one's surprise〉 以外は、COCA では有意な議論ができるほどの頻度がないことがわかる (surprise 以外にどのような「感情を表す名詞」を学習参考書に掲載すべきかについては、後で議論する)。そこで iWeb を対象に (11) - (14) と同様の処理を再度、行う。〈To one's surprise〉についても、他の表現との比較のために iWeb での頻度も示す。以下の (15) - (18) が正規表現およびその処理結果である。



- (15) 〈To one's surprise〉
- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) surprise\b [iWeb 対象]
  - b. my (6,894), our (1,132), his (968), their (593), her (573), your (123), its (6)
- (16) 〈To one's joy〉
- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) joy\b [iWeb 対象]
  - b. my (50), our (10), his (9), her (5), their (5), your (3), its (0)
- (17) 〈To one's sorrow〉
- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) sorrow\b [iWeb 対象]
  - b. my (12), our (4), their (4), his (2), your (1), her (0), its (0)
- (18) 〈To one's disappointment〉
- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) disappointment\b [iWeb 対象]
  - b. my (192), our (41), his (34), her (22), their (21), its (0), your (4)

以上の処理結果から、〈To one's+感情を表す名詞〉における one's については、my が最も高頻度で生起し、1 人称と 3 人称の生起頻度に比べ、2 人称は極端に低頻度であると言える（ただし「感情を表す名詞」により細部は異なる）。〈To one's surprise〉に関しては、COCA では your は皆無であり、iWeb では my 対 your の割合は、約 56 対 1 で、上述の〈make one's way〉の場合（首位の his 対最下位の your の割合は約 12 対 1）とは極端に開きが大きくなる。また、its についても極めて少数しか現れていない。表現によっては皆無である。この点も〈make one's way〉における its の生起頻度（(10b) で第 3 位の 1,150 回）とは大きく異なる。しかしながら学習者に提示する際には、to Jake's surprise のような人称代名詞の所有格形以外が生起する場合も考慮し、やはり one's という表記が最も妥当であると考えられる。2 人称が極めて低頻度であることを教授者が意識し、例文を提示する際には my を中心にすることや、明示的に 2 人称の your は生起しにくいということを伝える方が現実的であろう。本稿は、one's という表記を別の表記に変えることを主張しているのではない。このことは文法用語には部分的に不備がありながらも、現在、一般に使用されているものを使うのが現実的である、ということに言及した滝沢 (2017) の議論とも関係する。詳細は滝沢 (2017) を参照されたい。

さて、ここで〈To one's+感情を表す名詞〉の「感情を表す名詞」に焦点を当てる。約 140 億語のコーパスでも〈To one's joy〉、〈To one's sorrow〉については、my が一定数、生起することは確認できるが、それでも決して高頻度と言えない。まして他の my 以外の人称代名詞の所有格形となると、さらに低頻度となる。もちろん、ある語を学習する背景には様々な要因が関わるため、コーパスにおける頻度が低いからと言って、即、教える必要がないとはならない。しかし、学習参考書のような限られたスペースの中に効果的で、かつ最大限の情報を盛り込もうとするとき、単に「感情を表す名詞」であるという条件だけを満たせば良いかという点については検討の余地がある。ここで、COCA と iWeb を対象に、To my の右隣に生起する語を見てみよう。(19b) が COCA を対象にした処理結果で、(20b) が iWeb を対象にした処理結果である。一重下線部が (19b) と (20b) で重複する「感情を表す名詞」である。波線部を施した knowledge については 4.3 節で議論する。

- (19) a. \bTo my ([a-z-])\b [COCA 対象]  
 b. surprise (238), knowledge (184), mind (132), right (50), amazement (43), left (39), relief (35), great (32), horror (32), way (28), astonishment (25), delight (22), dismay (22), eye (19), father (19), mother (19), chagrin (15), wife (14), shock (12) など ※ joy は皆無, sorrow は頻度 2, disappointment は頻度 6 ((12b), (13b), (14b) 参照)
- (20) a. \bTo my ([a-z-])\b [iWeb 対象]  
 b. surprise (6,894), knowledge (5,847), mind (3,655), ears (787), understanding (784), amazement (769), delight (702), great (559), eye (548), dismay (482), eyes (481), way (472), horror (387), astonishment (300), left (262), right (255), shock (225), fellow (222), ear (216), relief (216), friends (211), utter (210), disappointment (192) など ※ joy は頻度 50, sorrow は頻度 12

両コーパスにおいて, surprise が圧倒的であることがわかる。「感情を表す名詞」としては, 次いで, amazement が現れる。両コーパスで順位は異なるが, relief, horror, astonishment, delight, dismay, shock が上位に現れる。joy や sorrow が上記の語に比べ生起頻度が低く, 順位でも上位ではない点も両コーパスで共通する事実である。二重下線を施した disappointment は iWeb であれば, 一定数は確認できる。頻度や順位を考慮すると, 少なくとも BT 総合 2 において <to one's+感情を表す名詞>の「感情を表す名詞」の例として掲載されている joy や sorrow は, amazement や delight などにもすることも検討できる。amazement については surprise との意味的な重複も考慮に入れる必要はあるだろうが, 学習者がより頻繁に出会う可能性の高い語であると考えられる。総合的に見ると, G 総合 2 で列挙されている「感情を表す名詞」は, 本稿での調査結果と概ね一致するが, joy の扱いについては議論の余地がある。

#### 4.3. <To (the best of) one's knowledge>

最後に, <To (the best of) one's knowledge> について議論する。学習参考書では, 以下の表 2 のように提示されている (下線は西脇。太字による強調は原典のまま。各例の和訳は省略。一部, 提示方法に変更を加えている)。

表 2 学習参考書における <to (the best of) one's knowledge> の提示方法

BT 総合 2 (p. 506)	「…に至るまで」: 範囲・程度を表す。[…] to the end, to the best of <u>one's</u> knowledge などがある。 [例文] <b>To the best of my knowledge</b> , that tower will be the tallest in the world when it is completed.
CC 総合 (p. 300)	[[「最上級を使った間違いやすい比較の表現」という大項目の中の「その他の関連表現」として] <b>to the best of my knowledge</b> [例文] <b>To the best of my knowledge</b> , his first book was published in 2003.
G 総合 2 (pp. 552-3)	範囲・限度 (～まで) […] to the best of ~ は「～(能力・知識など)の限りでは」という意味の慣用表現である。 [例文] <b>To (the best of) my knowledge</b> , he is honest and reliable.

<to one's+感情を表す名詞>の場合とは異なり, CC 総合は my に限定して提示している。<to (the



best of) one's knowledge) については、G5 (knowledge の項) が to (the best of) O's knowledge (and belief) という形で掲載し、この表現については「通例 O's は my」としている。CC 総合の提示方法は G5 (knowledge の項) の記述と合致する。

以下、〈To (the best of) one's knowledge〉について、COCA を対象にして観察する (〈To one's+ 感情を表す名詞〉の場合と同様に、文頭に生起する例に限定して議論を進める)。(21) は the best of が現れる場合で、(22) が現れない場合である。

(21) 〈To the best of one's knowledge〉

- a. \bTo the best of (my|our|your|his|her|its|their) knowledge\b [COCA 対象]
- b. my (90), our (77), your (12), his (2), her (1), their (1), its (0)

(22) 〈To one's knowledge〉

- a. \bTo (my|our|your|his|her|its|their) knowledge\b [COCA 対象]
- b. my (184), our (141), your (34), his (5), her (4), its (0), their (0)

いずれのコーパスでも my が首位である。この点だけなら上記の G5 (knowledge の項) の記述や CC 総合の提示方法は妥当であると言えるが、両コーパスの第 2 位の our は首位の my と僅差である。少なくとも文頭という位置では、そして、少なくとも COCA を対象にした場合には「通例 O's は my か our の 1 人称」という記述がより言語の事実と合致する。もちろん、G5 (knowledge の項) の記述は文頭での使用に限定されたものではないため、生起する位置については例文を丁寧に観察する必要がある。本稿では大量のデータからわかる量的な側面を重視したが、質的な側面については今後の課題とする。

ここで、上述の (19) (20) に話を戻す。以下に、それぞれ、(23) (24) として関係する部分のみ再度、掲載する。

(23) a. \bTo my ([a-z]+)\b [COCA 対象]

- b. surprise (238), knowledge (184), ...

(24) a. \bTo my ([a-z]+)\b [iWeb 対象]

- b. surprise (6,894), knowledge (5,847), ...

コーパス調査から、To my という連鎖にとっては knowledge より surprise の方が相性が良いことがわかる。一方で、(21b) (22b) で第 2 位であった (To) our にとっては surprise より knowledge の方が相性が良いことがわかる。以下、To our の右隣に生起する語を COCA および iWeb で観察する。(25b) が COCA、(26b) が iWeb での処理結果である。

(25) a. \bTo our ([a-z]+)\b [COCA 対象]

- b. knowledge (141), surprise (54), left (25), right (19), viewers (18), amazement (9), astonishment (6), dismay (6), great (6), relief (6), top (6), eyes (5), family (4), good (4), mutual (4), audience (3), north (3) (頻度 3 以上)

(26) a. \bTo our ([a-z-]+)\b [iWeb 対象]

- b. knowledge (1,957), surprise (1,132), delight (188), great (167), amazement (149), customers (106), dismay (106), friends (106), right (97), left (94), readers (92), eyes (88), loyal (72), valued (72), mind (71), minds (51) (頻度 50 以上)

To our の場合は、両コーパスにおいて knowledge が首位である。つまり、To our にとって knowledge という名詞は重要な語であると言える。このような事情も考慮すると、やはり、少なくとも G5 (knowledge の項) の記述は再検討する価値があるように思われる。それでは my に限定せず one's としている BT 総合 2 の提示方法は万能かという点、これは〈To one's+感情を表す名詞〉の場合と同じ注意が必要である。ここで改めて〈To (the best of) one's knowledge〉の one's に生起する人称について注目する。〈To one's surprise〉では 2 人称は極めて低頻度であったが、〈To (the best of) one's knowledge〉では首位の my、第 2 位の our に続くのは your である。〈To one's surprise〉の場合とは異なり、〈To (the best of) one's knowledge〉では 3 人称が極めて低頻度である (its にいたっては (21) (22) の両表現で皆無である)。したがって、単に one's とすれば問題が解決するわけではない。4.2 節の〈to one's+感情を表す名詞〉の場合と同様に、例文を提示する際には my を中心とすること、および 3 人称が低頻度であることなどを明示的に伝えることができる。

## 5. まとめ

本稿では、活用形を辞書形に纏め上げる lemma 化の危険性を念頭に置き、学習英文法における one's という表記の注意点について論じた。すなわち、頻度の観点から人称による大きな偏りのない〈make one's way〉という表現においては one's と纏め上げることにそれほど大きな支障はないが、〈To one's+感情を表す名詞〉や〈To (the best of) one's knowledge〉という表現においては、one's に生起する人称代名詞の人称に大きな偏りがあるため、その点に配慮した記述・指導が求められることを述べた。また、〈to one's+感情を表す名詞〉や〈to (the best of) one's knowledge〉については、既存の学習参考書や学習英和辞典の記述内容に改善を検討すべき箇所があることを指摘した。

今後の課題は、以下の通りである。まず、本稿で扱った表現の one's において、頻度は低いながらも皆無ではない語について、具体的にどのような場面で典型から外れる人称が生起するのかを、具体的な例を仔細に検討しながら明らかにすることである。また、各人称代名詞の所有格形そのもののジャンルによる偏りを明らかにした上で、各語の単独の生起頻度と各表現での生起頻度を比較し、表現と人称の関係性を明確にする。さらに、one's に関わる別の視点に議論の幅を広げる。例えば、COCA において、own の右隣に生起しやすい人称代名詞の所有格形は 3 人称の their, his, its, her が上位を占めることがわかっている<sup>7)</sup>。このことに文法的・語法的に何らかの意味があるのかについて、lemma 化することの危険性という視点から検討する。

注

- 1) 本稿では、COCA（商用契約）の1990年から2012年のデータ（約5億語）を使用している。iWebは約140億語のデータであり、COCAと同様に商用契約をしている。
- 2) 〈make one's way〉のmakeは、one's way構文で生起する典型的な動詞であるが、動詞makeの代わりに別の動詞が生起することもある。また、本来的な動詞に限らず、名詞が臨時的に動詞として機能する場合もある。one's way構文については、多くの研究成果が積み重ねられている。本稿では、学習英文法の立場から論じているため、最も基本的なmakeに限定して議論を進める（ただし、注5では、〈find one's way〉に言及する）。one's way構文の議論については、例えば近年のものであれば、大室（2018）や滝沢（2022）などを参照されたい。
- 3) (4b)で示す例のように、Toとone'sの間にはgreatなどの形容詞が生起し得る。また、以下の(i)のように現在分詞が生起する例もある。

(i) To my growing dismay, Chen remained silent and nearly motionless as I went through the rest of my presentation. (Erin Meyer, *The Culture Map*, p. 3)

さらに、(4b)の括弧内で示されているようにtoの前にはMuchなどの副詞が生起し得る。しかし、本稿では後の正規表現で明示するように、Toとone'sの間、およびtoの前に何らかの要素が生起しない例に限定して議論を進める。

- 4) G5 (knowledgeの項)に〈to (the best of) O's knowledge (and belief)〉という形で掲載されていることからわかるように、and beliefが後続する場合もあるが、本稿ではBT総合2、CC総合、G総合2の記述に基づき、and beliefが後続する表現については扱わない。
- 5) 注2で〈make one's way〉のmakeの部分（動詞部分）には様々な語が生起し得ることを述べたが、生起する動詞によっては、人称代名詞の生起順位が異なることや、その頻度に大きな偏りが生じる可能性もある。なお、大室（2018: 85）によると、動詞findはmakeに次いで、one's way構文で高頻度で使用される語である。〈find one's way〉のone'sに現れる人称代名詞の所有格形の頻度については、以下の通りである。

正規表現： (?i)\b(find(s|ing)?|found) (my|our|your|his|her|its|their) way\b [COCA 対象]

処理結果： their (1,252), its (946), his (547), your (302), my (296), her (259), our (163)

4.1節の(10)で示した〈make one's way〉の場合とは異なった生起順位となることがわかる。

- 6) 一方、例えば、学習英英辞典のLDOCE6 (wayの項)はmake your wayの形で見出しとして掲載している。しかし、例文はThe team slowly made their way back to base.であり、theirが用いられている。ただし、同じ項目の中でmake your own way (home/to sth etc)も扱われている。
- 7) ownの右隣に生起する語を調査するための正規表現および処理結果は、以下の通りである。

正規表現： \b([a-z]+) own\b [COCA 対象]

処理結果： their (66,805), his (56,399), its (28,747), her (27,941), my (23,929), your (20,844), our (16,299) など。

ここでは、調査項目を人称代名詞に限定していないが、上位は人称代名詞で占められていることがわかる。

参考文献

- Kjellmer, Goran. 1991. "A mint of phrases." in Aijmer, Karin and Bengt Altenberg (eds.), *English Corpus Linguistics*, New York: Longman, pp. 111 – 127.
- 西脇幸太. 2021. 「教科書本文に感想を一言加える活動—To one's surprise を例に（連載「コミュニケーションにつながる文法指導」第1回）」『英語教育』2021年4月号 第70巻 第1号, pp. 60–61.
- 大室剛志. 2018. 『ことばの基礎2 動詞と構文』（シリーズ英文法を解き明かす—現代英語の文法と語法2）

- 内田聖二・八木克正・安井泉（編）. 研究社.
- Stubbs, Michael. 1996. *Text and Corpus Analysis*. Oxford, Massachusetts: Blackwell.
- Stubbs, Michael. 2002. "Two quantitative methods of studying phraseology in English." *International Journal of Corpus*, 7 (2), pp. 215-244.
- 滝沢直宏. 2005. 「コーパスと言語教育」『日語教育』第31号, pp. 3-20, 韓国日本語教育學會.
- 滝沢直宏. 2006. 『コーパスで一目瞭然 品詞別 本物の英語はこう使う!』小学館.
- 滝沢直宏. 2007. 「言語の慣習性とコーパス」『2007年日語教學國際會議論文集』, pp. 61-73, 東呉大學.
- 滝沢直宏. 2016. 「コーパスからの情報抽出と抽出データの意味づけに関わる諸問題」『英語コーパス研究』第23号, pp. 45-60.
- 滝沢直宏. 2017. 「変えにくい「英文法」とその微修正」『電子情報通信学会技術研究報告（思考と言語）』Vol. 117, No. 218, pp. 31-36.
- 滝沢直宏. 2022. 「新たな視点から見た one's way 構文」田中智之・茨木正志郎・松元洋介・杉浦克哉・玉田貴裕・近藤亮一（編）『言語の本質を共時的・通時的に探る一大室剛志教授退職記念論文集一』開拓社, pp. 26-38.

### 辞書とその略記

- Cleveland Marwick, Karen, Lucy Hollingworth, Elizabeth Manning, Michael Murphy and Laura Wedgeworth (eds.) 2014. *Longman Dictionary of Contemporary English* (6th Edition), Harlow: Pearson Education Limited [LDOCE6]
- 井上永幸・赤野一郎（編）2019. 『ウィズダム英和辞典』（第4版）, 三省堂 [W4]
- 南出康世（編）2014. 『ジーニアス英和辞典』（第5版）, 大修館書店 [G5]
- 野村恵三・花本金吾・林龍次郎（編）2013. 『オーレックス英和辞典』（第2版）, 旺文社 [OL2]

### 学習参考書とその略記

- 井上永幸（監修）・和泉爾（編）2021. 『コーパス・クラウン総合英語』三省堂 [CC 総合]
- 中邑光男・山岡憲史・柏野健次（編）2022. 『ジーニアス総合英語』（第2版）, 大修館書店 [G 総合2]
- 吉波和彦・北村博一・上野隆男・本郷泰弘（編著）2015. 『ブレイクスルー総合英語』（改訂二版）美誠社 [BT 総合2]

### コーパスとその略記

- The Corpus of Contemporary American English の full text [COCA]
- The Intelligent Web Corpus の full text [iWeb]